
小さな運命共同体

哀loveコナン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小さな運命共同体

【Nコード】

N4767Z

【作者名】

哀loveコナン

【あらすじ】

短編集として書きたかったんですが、あまりにも長くなり過ぎて…連載にしました
予定していたものプラス少し加えて、コ哀小説を今度は連載して行きます。

医療全く無視をしたコ哀です。ネタバレになるので、どっちなかで言っておきます。どっちなかの死ネタになりますので、ご注意ください読んでください。

前作見ていただいた方はわかると思いますが、またあの優しい先生が出てきます。

コ哀を好きな人にとっては怒られるかもしれませんが、嫌な人はここでスルーしてください。

そして、今回は一話一話が短いと思います…前作と比べると…それと、あくまでコ哀なので、新一や新一の両親などの登場はありません…服部も（今の段階では）出てこないと思います。

それを含め、大丈夫な方のみ…閲覧お願いします。

VoI・i プロローグ 運命…それは…変えたいもの

運命…それは、一人一人が神様によつて授けられたもの…。

運命…それは、自分自身でどうにでも変える事が出来るもの…。

きっと、これもまた…”運命”なのかもしれない…。

”工藤君…私は貴方に…何もしてあげられないのよ…”

”お前は生きてくれてるじゃねーか…それだけで充分だよ…”

その言葉を交わした君と僕との間には…何があったんだらう？…その言葉…ちゃんと君に伝わったのかな…いつだって、励ましていたはずだったのに…。

でもこれが…君と僕の…最後の物語になつてしまつたんだね…。

君の運命を僕は変える事が出来たのかな…本当に君は…それで幸せになれたのかな…。

でも、君にあんな運命背負わせたくなかったんだ…だから、君の運命を…僕が変えてあげたかつたんだ…。

だから、お願い…僕がした事、許して欲しいんだ…。

そして…生きる事を諦めないで…お願いだから…なあ、灰原!!

Vol.1 プロローグ〜運命…それは…変えたいもの (後書き)

始まりました。

プロローグなので今回は短いです…。

読んでもらって嬉しいです。

今回は不定期になりますが、よろしく願いします。

時間があれば、それほどあかず、投稿できるとおもいます。

また、今回もヒントを残して、
次に進みたいと思います。

次回ヒント

準備したい事

次回、またよろしく願いします。

ある平日の朝…。

とある病院に来ていたコナンは、診察室で…蘭と小五郎が見守る中…医師によって、胸に聴診器を当てられていた…。

「うん…大丈夫だね。順調、順調…」

コナンの胸に当てられていた聴診器を離しながら、今度はコナンの頭に手を当てて微笑む先生の名は坂井医師…。

コナンが最も慕っている…コナンの主治医でもあった…。

「コナン君、こないだの話なんだけど…そろそろ、準備したいんだ…返事聞かせてもらえるかい？」

「まだ、大丈夫だよ…」

そう話すコナンは何となく、淋しそうな表情を浮かべて俯いていた…。その様子に見兼ねた坂井医師は、コナンに言った。

「…ねえ、コナン君…先生、ちょっと毛利さんと蘭さんに話がしたいから…コナン君は先に戻っていてもらえるかい？」

「僕だけ…内緒の話？」

不安な面持ちで坂井医師の顔を覗き込むコナンを見た坂井医師は、につこり笑いながら…コナンの頭を撫でながら言った…。

「違うよ…コナン君が納得してもらえるように…相談しなきゃだか

ら…それに、早くしないと取り返しのつかない事になっちゃうからね…」
「…うん」

突きつけられた自分の現実には、コナンは納得したくなくても、頷くしかなかった…。

そんなコナンを見た蘭はコナンの顔を覗き込んで、諭すかの様に話出した…。

「コナン君、大丈夫よ…すぐ行くから、病室でちゃんと待ってて…」

そう言われたコナンが診察室を後にした後、坂井医師は小五郎と蘭に話を始めた…。

「先日もお話ししましたが…コナン君の手術の準備をそろそろ取り掛かりたいと思うんですが…」

そう話す坂井医師だったが、コナンの事を思うあまり…自然と目が泳いでいた…。

「手術自体は、そう難しくありませんが…コナン君が手術を拒んで今の状況では、こちらとしても手術を行えないんです…ですから、毛利さん達から説得してもらえませんか？」

コナンに病気の事や手術の事を話してから、コナンがずっと手術を拒み続けている事を坂井医師は心配していた…。

でももう、時間が限られている…そんなコナンの手術に、坂井医師は少しばかりの焦りを感じていた…。

「でも、先生…私達が言っても…コナン君、分かってくれないと思
うんです…だから、先生から話してもらえるといいんですけど…
？」

蘭はコナンの性格を分かっていた…蘭達が手術の事を話しても”大
丈夫”と言って、聞く耳を持たないかもしれないから…。

だから、先生からもう一度言われた方が分かってくれれば、確信し
ていた…。

Vol. 2 診察結果 (後書き)

今晚わww

今日は変な時間に投稿ですww

一応、ストックが溜まって来たので

しばらくは毎日投稿になるとおもいますww

次回ヒント

哀ピンチ

次回もお楽しみに

VOI・3 **いなくなった小さな探偵と哀に迫る悪魔** (前書き)

今回、コナンは出て来ませんww

明日までお待ちください。(。・111)

「分かりました…」

蘭の頼みを聞き入れた、坂井医師はコナンにもう一度…手術の事を受け入れてもらえるように…蘭と小五郎を連れ、コナンが戻ったであろう病室に足を運んだ…。

コナンの病室の扉を開ける坂井医師は、目を見開いた…。

「あれ？コナン君？」

病室に戻るように言ったはずのコナンの姿がどこにもなかった…。

そればかりか、置いてあったはずのランドセルが、見当たらない事に気付いて…坂井医師はため息を一つした…。

「あのガキ…どこ行きやがった！！蘭、お前はここにいろっ…」

そう言つて、コナンを連れ戻しに行こうとする小五郎を坂井医師は止めた…。

「まあまあ、毛利さん…今すぐどうこういう問題ではありませんから…とりあえず、様子を見て見ましょう…コナン君ならきつと大丈夫ですから、帰ってくるのを待ちましょう？それに……」

そう言つて、腹を立ててる小五郎を落ち着かせた…そして、ひと呼吸置くと、再度口を開いて言った…。

「行き先は…分かってますから…」

一方、阿笠邸では…自分自身に降りかかる悪魔が徐々に詰め寄っている事に気づかず、哀はいつもの朝を過ごしていた…。

「博士…コーヒー、ここに置いてくわよ…」

「ああ、すまんな哀君………」

そう言うと、哀の差し出したコーヒーに手を伸ばし、それを口にすのを見た哀は…フッと笑い、嫌みをいいながら玄関へと歩き出した…。

「じゃ、私は学校に行くてくるわ…博士…私がないからと言って高カロリーな物食べ過ぎないようにね…」

「分かつとるわい………」

そういいながらも、残念そうな顔をする博士の顔を振り返って見た次の瞬間…哀は胸を抑えしゃがみこんでしまった…。

驚いた博士は哀に近づき、心配な面持ちで声をかけた…。

「哀君…どうしたんじゃ？」

「何でも…ハア…ないわ…ハア…いつもの事よ…ハア…すぐ治まるわ………」

「いつも？」

驚いた博士は、哀の発言に耳を疑った…。

「最近、良く…ハア…あるのよ…でも、大丈夫よ…ハアハア…心配…ないわ…」

苦しみながら、心配する博士を氣遣う哀…暫くすると、本当に苦しさは治まった様子で…強張らせていた顔も正常に戻っていた。

それに安心していた哀はゆっくり立つと、”ね？”といった感じで笑って見せた…。

そんな哀の様子に不安になり、哀に病院へ行く様に勧めた…。

「平気よ…それより、博士…工藤君から何か聞いてない？」

「新一？何をじゃ？」

「2日も学校休んでるのよ…まあ、博士が聞いてないなら問題ないと思うけど…じゃ、行ってきまーす…」

博士の心配をよそに、哀はなにもなかったかの様に平気な顔をして学校に向かった…。

閉まる扉を目にして、哀やコナンの事が心配になった博士は…暫くその扉の前で一人、佇んでいた…。

次回ヒント

噂の人物

今晚ww

今年も残り3日になりましたね

今日はスペシャルばかりで、何をみようか迷ってしまいます。(

。111)

始まってまだ間もないこの小説なんですが、死ねたというのを了承して読んでいただき&お気に入り登録や感想いただき、ありがとうございます。

励みになります。

では、また明日の投稿をお待ちください

哀が教室の扉を開け、入ろうとした時…歩美、元太、光彦は哀の姿に一目散に駆け寄った…。

「哀ちゃん!!おはよー」

「灰原さん、おはようございます…」

話があると言わんばかりに、哀の顔をじつと見つめる三人に…哀は不思議に思いながら、平静を装って聞いてみた…。

「おはよ…どうしたの?そんな顔して…」

「哀ちゃん…またコナン君お休みだって…」

「えっ??そう…」

言いたい事は分かっていた哀だったが、休みと聞いて…少しばかり心配が募っていた…。

「昨日、俺ら探偵事務所に行ったんだ…でもよ、家んなか真っ暗で…誰も居なかつたんだよ…」
「何かあつたんでしょうか?」

コナンの事が心配で堪らない少年探偵団…コナンが居るはずの探偵事務所に行っても誰もいないなんて事…今まで会つたんだらうか? そんな光景を目の当たりにした三人が、不安がらないはずもなかった…。

哀はそれでも、心配させない様にと諭しながら話始めた…。

「何言ってるのよ…彼なら大丈夫よ、ただの風邪でしょ？病院にでもいってたんじゃない？」

「でも…」

「だいたい、何かあったなら私達に言ってくるでしょ？そういう人でしょ？江戸川君は…」

そういつて、三人を凝視した…。そんな哀を見て三人は泣く泣く頷くしかなかった。

「はい、みんなー、席に着いてー出席を取るまえに報告です。今日もコナン君は風邪でお休みだそうです…でも、心配しないでね、ただの風邪みただから…」

小林先生は、教室に入って来るなり、教室にいる生徒達に報告した…。その言葉に、三人は騒ぎだし、後ろの席にいた元太が光彦に声をかけて来た。

「なあー、今日も帰り寄ってみよーぜ？」

「そうですね…」

「皆で行こー！！」

三人がそんな言葉を交わしている時…教室の扉が開いた……。

「おはようございます…」

顔を出したのは、噂をすればのコナンだった……。

「コナン君！！」

コナンの休む連絡を受けた直後の出来事だったので、さすがに皆驚いていた…。

小林先生がコナンに近寄り、自分の額とコナンの額を触り、見比べていた…。

「熱はないみたいだから、大丈夫そうだけど…」

「大丈夫だよ…もう治っちゃったから…」

「でも、無理しちゃダメよ？」

「うん、分かった!!」

そう言葉を交わすと、コナンを席に着かせた…。

席に着いたコナンは哀に”よっ”と、挨拶すると、哀は無駄な心配させられた事に不機嫌になり…瞳だけコナンの方に向かせると言った。

「余計な心配させてんじゃないわよ…」

「なんだお前、心配してくれてたのか…」

「私じゃないわ…あの子達によ…朝から大変だったんだから…」

「……………」

哀にそう言われたコナンは、ゆっくり三人の方へ視線を移すと、三人は心配な面持ちでコナンの方を見ていた…。

「コナンくん、哀ちゃん!!」

「帰りましょー!!」

「行こーぜー」

授業が、終わり…帰る支度をしているコナンと哀に向かって言葉が投げかけられた…。

「おう! ……帰ろーぜ、灰原…」

「ええ…」

そう言っつてランドセルを背負うと、五人揃って…久々の下校を共にしていた…。

そして…これが最後の五人揃っての下校になるなんて、この時は知る術もなかった…。

「大丈夫ですか? コナン君…」

「ああ、平気だよ…悪かったな…心配かけちゃって…」

「いえ…では、僕達こっちですから…」

そう言う光彦を先頭に、曲がり道に差し掛かった三人は二人に手を降り叫んでいた…。

「また明日会いましょう…」

「哀ちゃん、まったね〜」

「じゃーなー、コナン！！無理すんなよ！！」

そう言う三人に、コナンは大きく手を降り…哀は顔だけ向いて微笑んでいた…。

「わーってるよ、じゃーなー」

二人だけになって…哀は漸く本題を切り出す事が出来た。

「ねえ、今朝何で遅刻して来たの？」

「ああ、ちよつと寝坊しちゃって…」

分かりやすい嘘をつくコナンにジト目で見る哀は…目線を戻すと言った…。

「遅刻…それで私が納得すると思ってるの？」

「まあ、いいじゃねーか…あつ、じゃーなー」

「ちよつと…」

丁度曲がり道に差し掛かり、哀の言葉を無視して…コナンは探偵事務所の方へ歩いて行った…。

呆れながら、哀もまた帰り道を歩いている時…胸の痛みを感じた哀は、ドサツと音を立てて…その場に倒れこんでしまった。

それを感じたコナンは急いで哀の元へ駆けつけた…。

「おい、灰原…どうした？」

「うつつ…痛い…胸が苦しい…痛いっつ…」

コナンは心配な面持ちで、駆け寄り哀に声をかけるが、哀は更に胸を押さえて苦しみ出した…。

「おい、灰原…しっかりしろ…」

「うつつ…」

「灰原！？灰原あああー！ー！！」

コナンの叫び声が響き渡る中、哀はただただ、痛みを耐えていた…。

次回ヒント

治療中

こんばんわ、実は、この中に出てくる坂井先生はZARDから取り
ましたww

14年位、ファンなのです(^^^)

では、今日はとっても寒いから、みなさん風邪に気をつけてくださ
いねo(^ ^)o

哀が倒れたのを目にしたコナンは急いで自分の携帯で救急車と、阿笠博士に連絡した…。

直ぐに救急車が到着して…コナンも一緒に付き添っていた…。

救急隊員による処置を施されながら、コナンは哀の顔だけを見続けた…。

病院に着き…ストレッチャーに乗せられ、治療室に運ばれる哀を追いかけてながら、賢明に声をかけるコナン…。

「灰原!!」

身長が足らず、哀の顔を見る事ができないコナンだったけど…哀の苦しむ声だけは耳に届いていた…。

「坊や、ちょっとここで待っててね…」

治療室の前まで来ると、看護婦さんがコナンに声をかけた…その声の一つ頷くと、治療室に運ばれる哀の乗ったストレッチャーをずっと眺めていた…。

「コナン君…ダメじゃないか、走ったりしちゃ…」

その声に振り向くと…坂井医師が何時の間にかコナンの後ろに立つ

ていた…。

「先生……」

「先生の勘違いだったみたいだね…コナン君が倒れて…自分で救急車呼んだのかと思って…毛利さんに連絡しちゃったよ…」

コナンの目線までしゃがむ坂井医師はコナンの顔を覗き込むと言った…そんな坂井医師の顔を一度見ると…再びコナンの目線は治療室へ向いた…。

「君の、友達かい？」

そう言われ、一度俯いたコナンだったが…もう一度坂井医師の顔を見ると言った…。

「先生…灰原…大丈夫…だよな？」

「まだ、治療中だからね…担当の先生が出て来ないと分からないな

…」

「そう…」

コナンの頭に手を置きながらそう言う坂井医師の言葉を聞いたコナンは寂しそうに俯いた…。

「コラ、コナン…!」

その時、連絡を受け蘭を連れてやって来た小五郎に、コナンは鉄拳制裁を下された…。

「痛いよ、おじさん!」

「あつたりめーだ!!誰が学校行けって言ったんだ!!病室に戻れ

って言っただろーうがー!!」

「お父さん!! いいじゃない、ちゃんと戻って来たんだから…」

その光景に見兼ねて、坂井医師はコナンの手を握ると言った…。

「まあまあ、とりあえず一度診察室へ行きましょう? もう分かったよね? コナン君…???」

「うん…」

坂井医師の言葉に頷くと、コナンは頭を摩りながら…診察室へ連れていかれた…。

こんばんわ 〇ー、ー〇
今年最後の投稿となりました

今年も残すところWWW

3時間切りましたねへ(^^)(ノ^^)ノ
ガキ使見てる人、紅白見てる人…それぞれですが…皆さんが気持ち
のいい新年になるといいですね、

また、来年会いましょう(*´)(ノ;:.*+*. . . ;ノ
皆さん、よいお年を8 (^ ^ 8)(8 ^ ^)8””

では、今年最後のヒントにいきたいと思います

次回ヒント

約束

ですWWW

新年初投稿をお楽しみに??

「コナン君、息吸って…はい、吐いて…」

コナンは服をめくり、聴診器を胸に当てられながら…坂井医師の合図にゆっくりと呼吸をしていた…。

「先生…」

診察が終わったのを見るとコナンは静かに声をかけた…。

「灰原…」

「まだ詳しい事は分からないけど、さっきの様子だと、心臓かな…」

そう聞いて、俯くコナンを見ながらコナンの頭に手を置く坂井医師は静かに忠告した…。

「そろそろ、君も自分の事考えなきゃな…」

「……うん…」

そう言うと、コナンは坂井医師を見ると勢い良く言った…。

「ねえ、先生！！灰原の担当のお医者さん、先生がなって！！お願いー！」

「えっ？どうしてだい？」

「先生だったら、信用出来るから…」

そう言い、俯くコナンを見ながら困った様に言った…。

「でもね、担当の先生は治療した先生がなる事に決まってるからね
…」
「お願い!!」

そんなコナンは見兼ねた小五郎が口を挟んで来た…。

「先生を困らせんじゃねーんだよ!!」

「だってー」

「わかった!担当の先生に頼んでみるよ…で、その先生が承諾してくれたら…でもいいかな?」

「ありがとう、先生!!」

その言葉に、明るい表情を見せ元気よく返事をするコナンを見る坂井医師は、その先生が了承したらという条件で引き受ける事にした…。

治療を終えた哀が乗せられたストレッチャーを見送った後、担当の先生に駆け寄る坂井医師は暫く話した後、コナンの元へ戻って来た…。

「コナン君、今先生と引き継ぎしたからね…君の友達も先生が見る事になったよ…」

「よかった…それで、灰原は?」

喜びと同時に、哀の状態を聞くコナンに坂井医師は説明した…。

「心臓に、爆発を抱えてるんだって…だからね、その心臓が弱くなる前に丈夫な心臓と交換しなきゃならないんだ…」

「灰原死んじゃうの?」

「ドナーが見つければ大丈夫だよ…」

そういいながら笑顔を見せる坂井医師に、コナンは言った…。

「ねえ、先生…僕、ちゃんと自分の事考えるから…約束聞いてくれない？」

「……………」

坂井医師はコナンの口から出た言葉に耳を疑った…。

「それは、君が考える事じゃないよ…コナン君…」

皆さん、あけましておめでとう

ございます(〃´、´人´、´〃)

今年も引き続き、小説サイトにて、

更新に励みたいと思いますので

よろしく願います(*^^*)

では、新年初の更新ですwww

読んでいるとわかると思いますが、

だんだんと、コナンが何を決めようと

しているかが、わかってくるとおもいます。

次回ヒント

涙

明日もお楽しみにww

皆さんにとって今年一年が素敵な

年になります様に

「阿笠さんですか？」

「はい、それで哀君は？」

「こちらです…どうぞ…」

コナンの連絡で漸く駆けつけた博士は先生の案内の元、病室に向かった。

「博士…」

「哀君…やっぱり、今朝病院行った方が良かったんじゃない？」

「仕方ないじゃない！！こんな事になるなんて思わなかったんだから…」

その会話に不思議に思ったコナンはベッドに近づき言った。

「今朝って…何かあったのか？」

「別に…たいした事じゃないわ…」

「教えるよ！」

「何でもないって言ってるじゃない！！！」

それ以上聞いても無駄な事を察知したコナンはそれ以上何も言わなかった…。

「灰原哀さんだね…これから君の治療に携わる事になった坂井と言います…宜しくね！」

「………」

坂井医師の挨拶に哀は何も言わず、不機嫌なまま凝視していた…。

「先程の治療でね…君の心臓が原因だと分かったんだ…まずはドナー登録をして、君の心臓に一致するドナーが現れるまで入院して待つ？先生も一緒に頑張るから…」

「ドナーが現れなかったら？私は死ぬしかないのよね？」

坂井医師の言葉に、涙目になる哀は興奮して叫び出した。

「知ってるわよ、ドナーの事！！一致する心臓なんて、一握りだそうじゃない！何年待ってもドナーが現れないで死んで行く人だっているのよ！」

「灰原さん！」

「いいのよ…もう…私は…死ぬのを待つしかないんだから…」

哀は両手で顔を覆い、酷く落ち込み泣き出した…。

それを聞いていたコナンは博士の名前を震える声で呼んだ…。

「博士…」

「大丈夫じゃ、見つかる…きっと…」

その後何度も坂井医師は励ますが、哀は一向に顔をあげてはくれなかった…。

「とりあえず、ドナー登録の申請をしよう…もしかしたら、現れるかもしれないからね…阿笠さん、手続きをお願いします…」

「はい…」

博士は坂井医師に連れられて病室を出て行った…。

残ったコナンは哀のそばに近寄った…。

「灰原…大丈夫か??」

「ええ…今の所は生きてるんじゃない?」

まるで他人事のようにいう灰原をコナンは元気付けようとしていた…。

「大丈夫だよ、灰原…ドナー申請したんだし、きっと見つかるさ…」

「見つからなければ私は死に落ちるのよ…いい気味よね、本当…」

「やめるよ、そういう言い方…お前らしくねーぞ!!」

自分のことを卑下する哀にコナンは賢明に励ますが…哀の心には届きそうもなかった…。

「出てってくれない…」

「灰原…」

「出てってよっつ!!私の気持ちなんて貴方なんかに分かりっこないのよ!!…っ…」

そうコナンに叫んだ後、哀は再び両手で顔を覆って泣き出した…言葉を失ったコナンはただただ、哀を見つめるしかなかった…。

「また…来るから…」

そう言っつて、返事をしてくれない灰原を一人病室に残してコナンは静かに出て行った…。

病室の扉を閉め、寄りかかるコナンは俯いて拳を握りしめた…。

助けたくても助けられない自分の不甲斐なさを悔やみながら…。

こんばんわwww

正月休みでダラダラしている

今日この頃ですwww

小説を毎日書いていると、突然

書きたい内容は頭の中に有るのに

言葉が出てこないって言う事が

ありますwww

そついう時つて休んだ方がいいんだな

つて後回しするのが一番ですねwww

正月ボケが祟ってるのかもしれないがwww

ではでは、余談はこれ位にしてwww

次回ヒント

帰ろう

次回もまた

よろしく願いします。

p.s

始まってまだ間も無いこの小説にwww

お気に入りや感想、ポイントいただいて

ありがとうございます。

それを励みに頑張って行きたいと思います。

よろしく願いします＼(^o^)/

「コナン君……」

「お前ら……どうして?」

哀の病室の前で佇んでいたコナンは突然の訪問者に驚いていた。

「博士から聞いたんです……あの、灰原さんは……?」

「あいつ、酷く落ち込んでるんだ……だから、今はそつとしておいてやってくれないか??」

病室に目をやりながら、三人に話すコナンはなんとなく、悲しい目をしていた。

それに気づいた光彦はコナンの顔を覗きながら言った……。

「灰原さん、何かあったんですか??」

「……実はな……」

そう話そうとした時、コナンを呼ぶ声がして振り向いた……。

「蘭ねーちゃん……」

「哀ちゃん、どうしたの??」

蘭は病室に目をやりながら、コナンに尋ねた……。

蘭の問いに言いづらそうに俯いて、黙ってしまったコナンを見て……何かあったと察した蘭は、にっこり微笑みながら、コナンに手を差し伸べた……。

「コナン君、帰ろう？病室に……」

そう言った蘭の言葉に、近くで聞いていた三人は驚きながら、聞いた……。

「病室って??？」

「誰のですか??？」

尋ねてくる三人に、コナンは勢いよく振り向き……蘭も三人の顔を見ると少し微笑んで言った……。

「皆も来て……」

そして、コナンも蘭の発言に焦り……三人に知られたくない一心で蘭に助けを求めるかのような細い声で名前を呼んだ……。

「蘭ねえーちゃん……」

「隠しても、いざれバレちゃうんだから……言わなきゃダメよ……皆にも聞いてもらおう?？」

そう言った蘭の手を握り、仕方なく病室に戻る事にした……その後を黙ってついて行く歩美、元太、光彦は何が起こっているのか……不思議でたまらない心境だった……。

病室に戻ったコナンを待ち構えていた小五郎は蘭に手を引かれ戻ってきたコナンをニヤリと見て詰め寄ると言った……。

「よし、コナン！先生とこ行くぞ！！」

「まだ、大丈夫だよっ」

小五郎の言葉に、いつものように手術の事を言われるかと思っていたコナンはそう叫んで逃げ出した…。

そんなコナンをあっさりと捕まえると、小五郎はコナンを抱きあげると診察室へ向かった…。

「やだよ、おじさん！降ろしてよ！！」

「黙って来んだよ！！」

診察室の先生の所へ行くのが嫌で、行きたくないの一点張りの様子のコナンは小五郎に向かって叫んでいた。

そんなコナンの反抗も虚しく、診察室の扉が開かれた…。

「やあ、コナン君…今度こそ、聞かせてくれるかい???君の返事…

……」

コナンに問いかける坂井医師の後ろから心配な面持ちで顔を出した、歩美、元太、光彦の存在を確認すると…にっこりしながら、コナンの頭に手を当てて言った。

「そうか、今まで手術を拒んでいたのは…友達に知られたくなかつ

たからかな??コナン君?」

「先生!!!僕、先生にお願いしたい事があるんだ!!!」

コナンに向けて微笑む坂井医師とは反対にコナンの瞳は真つすぐと、そして真剣に坂井医師の方へ向けられていた…。

「先生、お願い!!!僕の最後の約束を聞いてほしんだ!!!」

これ以上にならない真剣さに…坂井医師は、その瞳を暫く黙って見つめていた…。

今日は凄く寒くなりましたね

まだまだ、正月気分が抜けず寒さを雑煮でしのいでいる。今日この頃です。

休みと言う事も、あり…この時間に投稿できるといふこともあり…
もう一話、夜中あたりに投稿したいなあと思いつつ、自分の行動を
制御しています。

では、次回ヒント

本気だよ

次回もまたお楽しみに

「約束って、さっきの事かい？」

「うんー！」

コナンの真っ直ぐな瞳を見つめ、困った様な表情を浮かべる坂井医師は…コナンから視線を反らして言った。

「さっきも言ったけど、それは君が考える事じゃ…」

「分かってるよー！でも、どうしても…守りたいんだー！あいつを助けたいんだよー！」

その会話に、何の話をしているのか分からない小五郎達は先生に問いかけた…。

「先生…あの、いったい…」

その言葉に、暗い表情を浮かべると…コナンを見つめた…。

「言っても、いいよ…」

コナンの言葉に、更に不安な表情を浮かべる坂井医師は小五郎達の方へ向き直ると、コナンに言われた約束を話した…。

「……………という訳なんです…友達の事を思う気持ちは分かりますが…とてもじゃないけど、承諾しきれません…」

先生からの話を聞き終わると…さすがに、驚きを隠せない様子でその場にいた全員がコナンを見つめていた…。

「コナン君…お願いだから、お友達の事は先生に任せて…君は手術をしてくれないかな…ドナーだって現れる可能性あるんだしね…！」
「現れなかったら？現れなかったら、あいつは死んじゃうんだよ！
！だったら…！」

「コナン君…！」

先生の説得も虚しく、コナンは頑として意見を変える様子もなかった。

それよりも、哀を守る事ばかりを考え…元太達や蘭の説得さえも決して首を縦に振ることはなかった…。

「お父さん…！」

そして蘭が小五郎に助けを求めると、小五郎はコナンの胸元を掴み…睨みつけながら言った…。

「お前！！本気なのか！！！」

「本気だよ！！！」

「もう一度、考え直せ…後悔しても知らねーぞ…！」

「後悔なんてしないよ！！僕が決めたんだから…！」

「やっぱりやめるっつっても、もう手遅れになっちまうんだぞ…！」

それでもいいのか…！」

「そんな事言わないよ…！」

睨みつける小五郎の言葉に、頑なに意見を曲げないコナンを見て、小五郎のコナンの胸元を掴む手に力が入る…。

「本気…なんだな！」
「うん！！」

小五郎のその言葉に勢いよく頷くコナンを見て、瞳を濡らすと…コナンの胸元を掴んでいた手を離し…コナンに背を向けた…。

「勝手にしろっ！！」

そんな小五郎を見た蘭はコナンの肩を掴み…自分の額をコナンの額に当てながら、潤んだ瞳を輝かせてもう一度ゆっくり話した…。

「ねえ、コナン君…もう一度、もう一度よく考え直して…貴方がいなくなったら、悲しむ人だっているのよ…」

「僕、もう決めたんだ！あいつを守るの、僕しかないから…最後まで、あいつを励まさないから…それに今、あいつすっごく落ち込んでるからさ…だから…ごめんね、蘭ねーちゃん…」

コナンの言葉一つ一つに重みを感じて…それ以上は反対できなかつた…コナンの言葉を聞きながら、肩を震わせ…閉じた瞳から涙がこぼれ出していた…。

「どうして…どうしてコナン君は…」

そっぴいなながら、コナンの小さな身体を抱きしめた…。

「だったら、精一杯…哀ちゃんの事、守ってあげるのよっ？」
「うん！！分かった！！ありがとう、蘭ねーちゃん…ごめんね…」

もう、これ以上コナンにいくら説得したとしても…納得なんてしてはくれない…。

誰が何を言っても、決してその決意を捻じ曲げる事なんてできない…。

そう感じた一同は、コナンの意思を悲しくも、受け入れる事にした…。

この先、何があるとも…コナンはこの時した決意を途中でやめる事なんてしないだろう…。

この先、なにがあるとも…絶対に…。

Vol.10 コナンの強い意思と想い (後書き)

こんばんわww

本日二度目の投稿になります。

休みだと、時間があつていいですね

その休みも、もうそろそろ終わるのですが…。

ところどころ、明かさない様な

感じには書いていますが、多分

そろそろわかつちやいます。

12話は特にwww

では、いつもの行きます(笑)

次回のヒント

すまない

では、また明日

お楽しみに

その様子を見ていた坂井医師は、コナンの方に向きを変えると真っ直ぐと顔を覗きこんで言った…。

「コナン君…私は医師として…君のいう事を受け入れる事は出来ない…出来ないけど…君はもう、意志を変えるつもりなんてないんだろ??」

「うん…!!」

再確認する坂井医師の目をじっと見て、真剣な表情のまま返事をするコナン…。

コナンのその目が、とても力強く…言葉を詰まらせられる…そんなコナンを見て、坂井医師はゆっくりと言い聞かせる様に話だした…。

「コナン君…今を逃せば、君の命を救う事が出来なくなる…この先、病状が悪化すれば、いくら手術をした所で、君を助けられないんだよ?分かってる??」

「うん!!」

そんな事を言っても尚、意志を曲げようとしなないコナンを見ると…坂井医師はもう…コナンを止める言葉を失っていた…。

「今は何もなく元気だけど…これから、少しずつ病状が進行する…今よりもずっと辛い思いをする事になるんだよ?覚悟はできてる??」

「うん!!大丈夫だよっその位、分かってるから…」

もう、何を言ってもダメなコナンに坂井医師は諦め、それならばと……コナンの顔を覗き込むと、真剣な眼差しで言った……。

「だったら、コナン君！これだけは守ってくれないか？絶対に無理しないって……少しでも、体調がおかしいと思ったら、先生に言っ
つてほしいんだ……」

コナンの肩に手を置いて頼む坂井医師の言葉に……少し俯くと、静かに言った……。

「ダメだよ、ダメだよ先生……少し位無理しなかったら、あいつに……灰原にバレちゃうじゃない!!」

「えっ?じゃ……灰原さんには……」

「うん!灰原には……僕の病気の事も全部……黙っててほしいんだ!!あいつに言ったら絶対反対されるし……それに、いつか言えたら言おうって思ってるからさ……」

そういい終わると、コナンは坂井医師に笑顔を見せた……。

そんなコナンの浮かべた笑顔を前にした坂井医師は耐えきれず、瞳から涙が溢れ出した……。

コナンは驚き、坂井医師の顔を覗き込んだ……それを隠すように、自分の手で顔を覆い……涙を拭うと言った……。

「すまない……」

初めて見る坂井医師の涙を目にすると……コナンは視線を落とした……。

コナンは分かっていた……自分の行動が周りにいる人達を悲しませ

てるって事を…だけど、どうしても助けたい…坂井医師を泣かせ
る事になっても、その意志は変える事なんて出来なかった…。

「ごめんね、先生…僕、もう一度あいつの所へ行ってくるよ…」

もうこれ以上、悲しい顔を見たくなかったコナンは足早に診察室を
飛び出した…。

こんばんわ

昨日の投稿で、結構分かってくれた見たいだったので、よかったです。

今回は少年探偵団にコナンが言い聞かす事になるので、そのセリフから本当に明らかになるといったのですが…もう心配ないようです。実は、短編で書いた時、読者にも最後の最後まで内緒にしておくストーリーにしてあったのですが、連載にすると一気に読むという事が難しいので、明かしました。

書いていると、読む側に回る事がすごく難しいので、バラさなきやよかったのって思ってしまったら、ごめんなさいww

でも、これから楽しんでもらえたら、うれしいです。

次回ヒント

笑うコナン

それでは、また明日会いましょう(=、(人)、(=)

vo1・12 笑っていてくれよ… (前書き)

今回はいつもより、短いです

二回に分けて時間をあけての投稿しようと思ったのですが、無理でした

その代わり、明日は長いですww

「コナン君…！」

哀の病室へ向かおうと、足を進めていたコナンに歩美は声をかけた…。

コナンは振り向くと、淋しそうな表情をしたまま…視線を三人の方に向けるて言った…。

「ごめんな…隠していた拳句、こんな事勝手に決めちゃって…」

「コナン君…どうしても？どうしても…駄目なの？もう、決めちゃったの??」

謝るコナンに対して、歩美は泣きじゃくりながらコナンに訴えるかのような声で聞いた…。

「あいつは…心臓移植しなきゃ死んじゃうんだ…だから、もうこれしかないって決めたんだよ…勝手かもしれないけど、あいつを守れるのは、俺しかないからさ…。」

コナンは淋しそうな表情を浮かべながら、三人の方に身体を向けて言った…。

「だから、ごめんな…。」

「コナン君…。」

そんなコナンの言葉を聞いた三人は涙を堪える事が出来なかった…。

「泣くなよな…俺はさ、俺の前ではさ、最期まで笑っててほしんだ…」

「コナン……」

「頼むよ…俺の最期のお願い聞いてくれないか??」

そんなお願いをするコナンをみると、三人は何も言えず…ただ、涙を流すだけだった…それを見たコナンは微笑みながら明るく言った…。

「ほら、行こうぜ?あいつ、今一人なんだからさ…」

「うん……」

やっとの想いで返事をする三人は顔を見合わせると…コナンに精一杯の笑顔を見せた…そして四人で哀のいる病室へ向かった…。

今晚ww

今日は仕事始めでしたww始まりだと言うのに、仕事中心居眠り状態でした¥(ノノノノ)¥

明日からは気をつけなきゃです(^O^)/

今回は、探偵団との会話でしたww

コナンの決意に何も言えない探偵団達は、なんだか、さみしそうです(T|T)\(^-^)

書いてる自分が言うのも、なんですww

次回ヒントは

諦めるな

です 今日から仕事初めの人も、明日からの人も、まだ、まだおやすみが続く人も、残りの正月を楽しんでください(^O^)/

明日お仕事の人は、お仕事頑張りましょう

また、明日の投稿お楽しみに

哀のいる病室の扉を開けると、博士が心配そうな面持ちで哀を見ていた…。

コナン達に気づいた博士は少し淋しそうな表情をして目だけで哀に視線を送った…。

コナン達は哀の側に近寄ると、声をかけた…。

「灰原…」

そういうコナンの声に哀は不機嫌になりながら、冷たく言い放った…。

「出てってくれない??」

「哀ちゃん、あのね…」

「出てってっって言ってるじゃない!!」

相当ショックなんだろう…普段言わない歩美の言葉にまでも冷たく言い放つ灰原…見兼ねたコナンは小さく微笑みながら言った…。

「まあ、そう言うなって…せっかく来てくれたんだぜ??」

「余計なお世話よ…」

「…お前、もう…諦めてんのかよ?」

呆れながら言うコナンの言葉に、灰原はベッドから起き上がり、コナンの方を向き叫びだした…。

「あなたに…貴方なんかは何がわかるのよ！！病気になった事のない人に私の気持ちなんてわかる分けないのよっ！！」

コナンの事情を知らない哀は、コナンに向けて…突き刺さる言葉を投げかけていた…。

「哀ちゃん！！コナン君は…コナン君はね………」

「分からねーよ…」

見兼ねた歩美が言いかけた言葉を遮り、コナンは小さくつぶやいた…。

「分からねーよ！ドナーが見つかるかもしれねーっていうのに、諦めてるお前の気持ちかな！！」

その言葉を聞いた哀は言葉を失って、瞳に溜め込んでいた涙が更に溢れ出し…勢いよく頬を伝った…。

その時、ナースコールから聞こえて来た坂井医師の声で話はそこで終わりになった…。

「コナン君？そこにいるかい??」

「…あつ、先生…すぐ戻るよ！！」

コナンはそう返事して哀に微笑むと…静かに扉の方へ向かった…。

「灰原…とりあえず、諦めるはやめるよな…また来るからさ…じやあな！」

そう言って、コナンは静かに扉を開けて病室を後にした…。

コナンがいなくなった後の病室の中で、哀と阿笠博士と少年探偵団は沈黙の中を神妙な面持ちのまま残されていた……。

「……あなた達も帰っていいわよ……」

沈黙を破ったのは哀だった……。

哀は俯きながら、歩美達の顔を見ずに静かに言った……。

「でも……」

「いいから、帰ってくれない……このままじゃ、あなた達にもっとひどい事言ってしまうもの……」

涙を流しながら訴える、哀を見た歩美達は顔を見合わせると、静かに口を開いた。

「じゃあ、灰原さん……またきますから……」

「元気だせよ……」

「またね、哀ちゃん……」

それぞれに顔をあげてくれない哀にそう挨拶をすると、歩美達もまた静かに出て行った……。

Vol.13 分からねーよ…… (後書き)

こんばんわww

今日はお祭りだった為、投稿が遅くなつてすみませんww

いつも楽しみにしていただいて、ありがとうございます。

それでは、今回は一言が少ないですが…

次回ヒント

もう一つだけ…

では、また明日お楽しみに

もしかしたら、二回投稿するかもです(^o^)

坂井医師に呼び戻されたコナンは診察室の扉を静かに開けた…。

「やあ、コナン君…悪かったね、呼び出したりして…。」

「いいんだ…。」

そんなコナンの顔を覗く坂井医師は、あえて聞かず…コナンを診察室の椅子に促した…。

「ねえ、おじさんと蘭ねーちゃんは??」

「また明日くるって言って、今日は帰ったよ…。」

そう聞いたコナンは少し淋しい表情を浮かべて言った…。

「えっ?僕を置いて??」

「何を言ってるんだい、コナン君…君は今入院中なんだよ!」

笑いながら、コナンに言い聞かせた坂井医師の言葉に目を丸くすると、思い出したかのように呟いた…。

「あつ、そっか…。」

「そっかじゃないだろう…そんなんじゃ、灰原さんの事守れないぞ??」

半分飽きれながら言う坂井医師に促されながら、服を持ち上げて軽い診察を受けていた…。

「ねえ、先生…もう一つ、お願い聞いて欲しいんだけど…」
「……怖いな…なんだい？」

診察を終えたコナンは坂井医師の顔を覗き込みながら、恐る恐る聞いてみた…。

「ギリギリまで…学校には、行かせて欲しいんだ…終わったら、ちゃんと病院に帰って来るからさ…」

「……」
「大丈夫だよ、まだ何もないしさ…それに、死んじゃったら学校にはもう行けないでしょ？…この後だって突然いけなくなっちゃうかもしれないしさ…だから今の内に行っておきたいんだよ…お願い、先生！！」

考え込む坂井医師にコナンは必死になって訴えかける様に頼み込んだ…。

「大丈夫！ちゃんと、あいつらのそばにいるから、何かあったら救急車を呼んでくれる様に頼んでおくからさ！！」

黙ってしまった坂井医師にどうにか、分かってもらえる様に…コナンは必死に訴えかけていた…。

そんなコナンに坂井医師は言い聞かせる様に話し始めた…。

「コナン君…君は、もう本当は手術しなきゃいけない身体だ…時間がないって言う事も分かるよね？」

「うん…」

「学校に行かせたら、何が起こるか分からないんだよ…倒れる事だ

って…苦しくなる事だ…立つ事もできなくなる事だ…あるかもしれない…いずれにせよ、危険な事はこれ以上はさせられないよ…コナン君…」

コナンの訴えも虚しく、坂井医師は頑なに学校への登校を許す事は出来なかった…。

「先生…」

それでも、諦めきれないコナンは…カルテにペンを走らせ始めた坂井医師の顔を見ながら名前を呼んだ…。

コナンの小さな声を聞いた坂井医師は、カルテから目を離してペンを置き…コナンの方に体を向けると…言った…。

「じゃあ、2日後…2日間、様子を見て何もなかったら…許可する…何かあったら、大人しく…病室で寝てる事…それでいいかい？」
「先生…」

坂井医師のその言葉に、コナンは嬉しそうに満面の笑顔を向けた…。

「ありがとう、先生！！」

坂井医師に向けたコナンのその屈託のない笑顔が…より、これからのコナンの身体の事を不安にさせられる…。

今は病気なんかなくてないと、思わせられる位元気だけど…これからが、コナンの身体の本番になる。

その事を坂井医師は先程の診察を通して再確認し…目の前で笑って

いるコナンの笑顔を目に焼き付けた…。

いつまで…この本当の笑顔を見られるのか…坂井医師は、コナンの笑顔を前にし…複雑な面持ちでコナンの頭を撫でながら、笑顔を返した…。

零れそうな涙を食い止めながら…。

おはようございます

今日は仕事がお休みなため、朝からの投稿です(^ O ^) / いつも
今頃、通勤時間ですね

寒くてまだ、布団からでられない状況です(^ - ^) /

この頃から、コナンのお願いにビクく先生…：まあ、それでも真剣
に聞いてちょうのですがww

まだ、コナンの病気が進行してない状況での次回ですww

それでは…

次回ヒント

慌てる

です。誰が慌てるのか、今回の話からは予想もつかないかんじです
が、また今日の何処かで投稿しようと思います。

それでは…お楽しみに

――翌々日――

夕方、学校から帰ってきた蘭はコナンの病院を訪れた……。

ベットの側に近寄ってみると、両腕を頭の側まで折り曲げながら、小さく寝息を立てて眠っていた……。

「コナン君、コナン君……」

夕飯が運ばれてきたのを見ると、蘭はコナンの体を揺らし起こそうと試みた……。

暫くすると、コナンは重い瞼をゆっくり開けると……蘭の顔を視界に入れた……。

「……蘭ね〜ちゃん……」

「おはよ、コナン君……よく寝てたね……夕飯だつて……」

そう聞いたコナンは勢いよく起き上がった……。

「今、何時??」

「もうすぐ5時よ……」

「……!!!行かなくちゃっ……」

そう言つと、コナンはベッドから飛び降りた……そして着替えようと自分の服を探していた……。

「あれ？僕の服は??」

「えっ?? 持って帰っちゃったけど…大丈夫よ、明日の朝持って来るから…」

そう言っただけで蘭を見ながら、コナンは困った顔で蘭に向かって口を開いた…。

「明日じゃ間に合わないんだよ、今、必要なんだよ」

「どうして?」

「灰原の所に行くのに、こんな格好で行ったら、入院してるのばれちゃうじゃない!」

その騒ぎに生じて、坂井医師が子供用のコートを持って入ってきた…。

そしてコナンに羽織らせると、にっこり笑って言った。

「これで問題ないだろ?? パジャマもコートで隠れるし…でも、夕飯食べ終わってから行きなさい…」

「…あ、ありがとう…」

突然の坂井医師の提案に、驚きながら、お礼を言うコナンは…急いで夕食を口に詰め込ませた…。

ゆっくり食べる様に促す坂井医師だったが…”分かってる”といいながら…食べる速度は変わらなかった…。

「いつてきまーす」

夕飯を食べ終ると…そう言って、勢いよくベッドから飛び降り…慌

てて病室から出て行くコナンを坂井医師と蘭は顔を見合わせ…笑っていた…。

「コナン君、走らない!!」

「はい」

そう言っつて、病院の廊下を走りながら、哀の病室に駆け込んだ…。

食事をしていた哀は突然扉がバンと開いた事に驚き…扉に目をやった…。

「よひ…」

「何よ、慌てて入ってきて…死んだと思った??悪いけど、まだ辛うじて生きてるわ…ご心配なく…」

扉を開けた犯人がコナンだと知ると…哀はいつもの様に、コナンに向けて嫌味な口調で言い放った…。

「お前が簡単に死ぬわけねーだろ…悪かったな、今日はちょっと遅くなっちまって…」

「…悪いけど、私あなたの事待ってるつもりなんてないわ…」

「そう言っつなって…」

予想通りの口調に、コナンは微笑み…扉を閉め哀の側に近寄った…。

「どつだ?具合は…」

「そう言っつもの、聞いて欲しくないんだけど…」

「いいじゃねーか、教えるよ…」

具合いを聞かれ、機嫌悪くする哀を心配するコナンだったけど…、
嫌味を言う哀を目の前にして…聞かなくても、具合いはいいのはわ
かっていた。

「別に…普通よ…」

やっと答えてくれる哀に、漸くコナンも微笑む事が出来る…そんな
コナンを横目で見ながら、黙々と夕飯を食べ続けていた…。

こんばんわww

今日は新年初のコナンでしたね(^o^) /

Twitterしながら、みていたんですが、

皆さん興奮しちゃって、TLが

早すぎちゃいました(^ - ^) /

それほど、可愛いですよね¥ (/ / / /) ¥

コ蘭は特にwww

ちなみに私も大興奮でしたwww

あれは、一人じゃないと見られないくらいにww

次回ヒント

散歩

また明日、

お楽しみに

夕飯を食べ終わった後の一室で…コナンは再び尋ねた…。

「なあ…あの…」

「何よ…」

そう聞くコナンはゆっくりと視線を哀の心臓へと移した…。

「…大丈夫だって言ってるじゃない…余計な心配しないでくれない
…」

「じゃあさ、散歩行かねーか??」

コナンは哀の調子が平気なのを再確認すると、満面の笑みで問いかけた…。

「はあ?」

「行くうぜ…ここに居てもつまんねーしよ…」

「だったら、帰って推理小説でも読めばいいじゃない!」

「俺じゃねーよ、お前がさ…」

「私の事はほっといてって何度言ったら、分かるのよ!」

私の事は構わないでと一点張りの哀に、コナンはもう一度恐る恐る聞いて見た…。

「なあ…灰原………」

「い、や、よっ!」

「少しだ…」

「嫌っっ!」

それだけ言うと、哀は布団を被り…それ以上答えてくれなかった…。
コナンはため息をして一言言い残すと…仕方なく、病室を出る事に…した…。

「また明日来るから…」

コナンが出て行ったのを、扉の方に目をやりながら確認した…。

「フンッ」

それだけ言うと、再び布団を被り…不機嫌なまま寝たふりを始めた…。

病室に戻ったコナンに、坂井医師は明日の学校への許可を下す為…入念な診察を行っていた…。

「これなら、許可しても問題ないかな…コナン君…」

「ありがとう、先生…」

明日の学校への許可が下りて、一安心しているコナンの手に坂井医師はにっこりしながら、注意事項が書いてる紙を手渡した…。

「これ、明日担任の先生に渡すんだよ…それと、分かっていると思うけど…体育は禁止…少しでも体調が悪くなったら、必ず誰かに言う事…」

「うん、分かった…」

コナンの返事につこり笑う坂井医師は、暫くコナンの目をじっと見つめて頭を撫でていた…。

「コナンー!!」

そう言いながら入ってきた少年探偵団に、コナンは微笑みながら振り向いた…。

「おっつ」

「ここに居たんですね、灰原さんの所かと思って行っただんですが、灰原さん、寝てるみたいだったので…」

「いや、寝てねーよ…」

光彦の説明に、否定するコナンに不思議になる三人と坂井医師にさっきの事を話した…。

その話を聞いて初めに声をあげたのは坂井医師だった…。

「えっ?ダメじゃないかコナン君…先生は散歩なんてそんな事許可した覚えはないぞ!!」

「でも、中庭くらいならいいでしょ?」

「ダメだよ!!何かあったら、どうするんだい??」

そう言われ、黙るコナンに先生は再度口を開いた…。

「でも、良かったな…灰原さんが断ってくれて…」

「先生……」

「君にもしもの事があったら、誰が灰原さんを守るんだい?」

「…そうだね…ごめんなさい…」

そう言っただ観念したコナンはゆっくり俯いて謝った…。

「皆も、明日からコナン君の事よろしくな…ちゃんと見張ってくれ…これ以上、無茶しない様に…」

「はい、任せてください!!」

「俺らがついてるから、大丈夫なっ？」

「うん!!」

凹んでいるコナン対して、三人は”コナンを守る”と張り切っていた…。

そんな三人を尻目にコナンはどうか明日の登校の許可を下された事に、安堵していた…。

そして残り少ない自分の命を、どう生きようかと…コナンはその気持ちに立ち向かっていた…。

こんばんわww

いつも、感想ありがとうございます(^ ^)

とても励みになっています)・・・(ノ

返信が遅くなる場合もありますが、気長に待つて頂けると倅です。
だいたいは、ここを開いたらすぐに返せるんですが…。

改めまして深夜の投稿になります。

休日になると、ダラダラしてしまってダメですねww

次回ヒント

不機嫌

また夜当たり???

になると思いますが、お楽しみに(^・^)/

次回は少し、短いです¥(ノノノノ)¥

「おはよ、コナン君…はい、熱計って…」

そう言われ、体温計を脇に挟むコナン…再び看護婦さんの方に目をやると…聞いた。

「ねえ、なんで僕入院しなきゃいけないの??まだ、何も無いのに…」

「何かあったら、困るからよ…」

「何かあってからでもいいじゃない…」

「それじゃ、遅いの…だめよ、わがまま言ったら…」

体温計が鳴るのを待つ間…看護婦さんに、文句を言うコナンは…学校の許可が下りた事で…自宅から通いたくなって来ていた…。

「僕、元気だよ？」

そんなやり取りをしている内に体温計が鳴って看護婦さんによって、平熱が確認された…。

「大丈夫ね、じゃあ…お姉さんが迎えに来るまで待っててね…」

「いいよ、自分で行けるから…」

そう言うと、タベ蘭がこっそり置きに来ていた服に着替えると…ランドセルを背負って病室を飛び出した…。

「まちなさい、コナン君…!」

「いつてきまーす…」

急いで走り出したコナンはその時丁度やってきた蘭とぶつかって、尻もちをついた…。

「コナン君…もう、待っててって言ったじゃない!!はい…」

そう言って、コナンに手を差し伸べた…。

「それじゃ、いってきまーす…」

そう挨拶する蘭に連れられて、今度は大人しく学校に向かった…。

「蘭ねーちゃん…迎えに来なくていいよ…」

「いいじゃない、一緒に行こうよ…」

「どうせ、僕の事が心配なんでしょ?何かあったら困るから…」

「…コナン君…どうしたのよ…」

いつもと違って少し不機嫌なコナンに少し心配になっていた…。

「探偵事務所から学校に行きたいんだよ…」

「…じゃ、後で先生に聞いてみよっか?」

「えっ?…う、うん…」

口から出た我儘によって、怒られるかと思っていたコナンだったが、蘭に優しく諭され、目を丸くした…。

Vol. 17

不機嫌なコナン (後書き)

次回ヒント

ひどい

また夜に来ます

「じゃ、俺…先生の所に行つて来るから…」

「分かりました」

「先、行つてるぜ」

「おうっ」

無事に学校が終わり、歩美達にそう言葉を交わした後…コナンは坂井医師の居る、診察室に向かった…。

コナンはゆっくり診察室の扉を開けると…そこには、コナンの帰りを待ち望んでいた坂井医師が居た…。

「どうだった？学校は？」

「大丈夫だよ…ちゃんと帰ってきたじゃない！！元気だよ…」

体調の事を聞かれたと思ったコナンは賢明に何も無い事を訴えた…。

「そうじゃなくて…楽しかったかい？」

「あっ、うん！！」

そう答えるコナンに坂井医師は安堵した…しかし次の瞬間、コナンの顔色が良くない事に気づいてコナンの額に手を当てようと伸ばした…。

「だ、大丈夫だよ…」

そついいながら、坂井医師が伸ばす手を避けて…両手で自分の額を

覆った…。

「コナン君、ちょっと来なさい…」

「僕、灰原の所へ行かなきゃだから、またね…」

そう言って出て行くこうとするコナンの手を掴み、後ろから体を抱き込むと…強引に額に手を当てた…。

「やっぱり…熱あるじゃないか…隠しちゃダメだろ、コナン君…」

「ひどいよ、先生…」

不意を打たれたコナンは坂井医師の言葉を聞き流し…抱き込まれた身体を摩った…。

そんなコナンの背中を押しながら、病室に戻るように促した…。

「まだ、灰原の所へ行っていないんだよ!!」

「でも、熱があるよ…」

「ただの風邪だよ…灰原の所に行ってからでもいいでしょう?」

少し熱が高いくらいだった為、坂井医師は…コナンにマスクを装着させた…。

「じゃ、先生も付いて行くよ…」

そう言って、コナンの手を握り…哀の病室まで歩き出した…。

こんばんわww

とりあえず、今日はこれで

ラストになります。

次回ヒント

待ってて

また明日…

投稿するのは昼間か…夜かになると思います。

楽しみに待っててください。

「じゃあ、先生はここで待っててね…」

「ああ、行っておいで…」

そう言って、哀の病室の扉を開けるコナン…。

哀の病室に入って行くのを見届けると…坂井医師は、壁にもたれ掛かり…そつと、息を吐いた…。

しばらくすると…病室の中では、明るい声が聞こえ始めた…でも、この明るい声はいつまでも続かないのは分かっていた…。

後、何ヶ月後には…涙声に変わると言う事…そんな事をぼんやり考えながら、今はただ…コナンや哀の事を賢明に支え抜くしかないと思っていた…。

白衣のポケットに自分の手を突っ込んで待っていると…哀とコナンの口喧嘩が耳に入る…それを聞くと、少し顔が微笑んだ…。

そんな光景を耳にすると…出来るだけ永く、生きさせてあげたいと…強く思っただった…。

「コナン君!!」

「悪いな、待たせて…元気か？」

コナンは哀の病室の扉を開け、声をかけた…暫く話した後、哀の方へ向きを変える…。

元気そうに見えるが、念の為聞くコナンに…哀は不機嫌な目をさせ、コナンの付けてるマスクを睨んで言った…。

「何、そのマスク…風邪でもひいたのかしら？」

「ああ、今日、寒かったし…予防だよ…」

「そんなんで誤魔化せると思ってるの？貴方は帰りなさい…風邪でも移されたら迷惑だわ…」

「心配ねーよ、ただの風邪だから…」

「お大事に…」

「灰原…せつかくき…」

「お、だ、い、じ、に…！」

哀の口調がだんだん強くなっていくのを感じ、それ以上は言えずにいた…。

「わあ…たよ…じゃ、帰るよ…」

「ちよっと…ちゃんと風邪治してから来なさいよね…」

「ああ…」

そう一言残すと、コナンは哀の病室を出ていった…。

「灰原さん…もうちょっと優しくいってあげてもいいんじゃないですか？コナン君、心配してるんですから…」

「これでも、優しく言ってるつもりよ…」

本当は、コナンはもう永く生きられないと言いたかった…。

でも、コナンの気持ちを考えてら、そんな事口が裂けても言う事な
んてできない…。

そんな三人の気持ちも裏腹に…哀はいつも通り、コナンに冷たく当
たってしまうのだった…。

寝る前に、もう一話
投稿したいと思います。

次回ヒント
哀の病室で

では、今度こそ、また明日ww
おやすみなさい。

「先生……」

哀に冷たくあしらわれ、凹みながら出てきたコナンに坂井医師は姿勢を正すと言った…。

「コナン君…随分早かったね…」

「マスクしていたから…灰原に、追い出されちゃって…」

そういいながら、頭を掻いて笑うコナンに詰め寄る坂井医師は、コナンの目線までしゃがみ込み、額に手を当てると心配そうに聞いた。

「大丈夫かい？」

「えっ？う、うん…平気……」

「そっか…じゃあ、行こうか？」

そう言つて、坂井医師はコナンに背中を差し出した…その行動にコナンはキョトンとして目をパチパチさせていた…。

「ほら、おんぶ…病室まで連れてってあげるから…」

「いいよ…」

恥ずかしげに言うコナンに、坂井医師は促し続けた…。

「僕、先に帰るから」

「あつ、コナン君…待ちなさい……」

そんな坂井医師の優しさに照れながら、コナンは一人で病室まで走

って行ってしまった…。

「たくっ…」

そう言う、坂井医師だったけど…元気に走るコナンを見て、少しばかり微笑んでいた…。

病室に戻ると、コナンをベッドに座らせて…体温計で熱を計っていた…。

「うーん、やっぱり少しあるね…」

「明日…下がる??」

体温計を覗く坂井医師の顔を見つめながら、心配そうに聞くコナン…。

「コナン君が大人しく寝ていれば、下がるんじゃないか？」

「……」

「ハハ、大丈夫…薬のんで、点滴すれば…明日には下がるから…安心して寝てなさい…」

「うん、わかった…」

そう言って、コナンを寝かせて布団をかけると、コナンの頭を撫でながら微笑んで言った。

「それと…具合が悪くなったら、今度はちゃんと訊んだよ?いいね?」

「はい…」

その頃、哀の病室にいた三人が病室を出ようとしていた時、事は起こった…。

「それじゃあ…僕達もそろそろ帰ります…」

「また明日来るからよ…」

「待って…」

そう言っただけで帰ろうと、背中を向けた三人に哀が声をかけた。

振り向いた三人はその光景を目にすると驚きながら詰め寄った…。

「哀ちゃん…」

「うつつ…悪いんだけど…うつつ…行く前に、ナースコール…押して行ってくれない？はあっあっ…」

それだけ言っただけで、哀はベッドに倒れこんだ…。

哀が胸を押さえて、苦しそうにしていたのを見て…急いでナースコールを鳴らす光彦…。

「早く、来てください！！灰原さんが…灰原さんが！！」

駆けつけた坂井医師や看護婦さんは、哀に声をかけられながら、ストレッチャーに乗せられる…。

「ああっ…」

「灰原さん、大丈夫だよ…少しだけ辛抱するんだよ…」

そういいながら、哀の乗せられたストレッチャーが処置室へと運ばれて行った…。

その様子を歩美、元太、光彦はただ、某然と立ちすくんでいた…。

その非常事態を目にして…不安いっばいな気持ちで、処置室の扉を見つめていた…。

その沈黙を破り、思い出したかの様に、光彦が口を開いた…。

「そつだ…コナン君…コナン君にこの事知らせたほうがいいですよ
ね…」

「そつだね、行こう…」

「おう！」

三人は口を揃えて言うと、コナンの居る病室に向かった…。

こんばんわ

今日は遅くなりましたが
更新です

明日から仕事が
またスタートなので、
いつもの様に
一日一話ずつの
更新です

では
次回ヒント
風邪

ではまた明日の
更新まで
お楽しみに

その後すぐに、コナンの病室の扉を静かに開けた歩美達…。

そこに飛び込んで来たのは、点滴に繋がれて…眠っているコナンだった…。

「コナン君…どうしたんですか？」

丁度、コナンの看病をしていた看護婦さんに光彦は聞いた…。

「ただの風邪だから、心配ないよ…少し熱があったからね、点滴しただけ…明日の朝には下がるわよ…」

そう言って、コナンの額に手を当てながら…ぬるくなったタオルを変えていた…。

「今日は起きないの??」

「丁度、さっき眠った所だから…何か用事??」

歩美の問いに、看護婦さんは優しく聞いて来た…。

「灰原さんの事、伝えたほうがいいかと思ひまして…」

「コナンのやつ、すげー心配してるからよ…」

その答えに、微笑む看護婦さんは…歩美達の視線までしゃがんで言った。

「うーん、それはまだ伝えないほうがいいかな?それに、きつと先

生が教えてあげると思っから…」

看護婦さんの言葉を耳にして、コナンの方へ目をやると…納得したかの様に、返事をした…。

「わかりました!！」

「また、明日くる!！」

そう言っつて、三人は病室を後にした…。

哀が運ばれて三時間後、コナンは薄っすらと目を覚ました…。

開いたままの扉の方へ目を向けると…誰かがストレッチャーに乗せられて出て来るのが見えた…。

それが、哀だと知らず…コナン再び目を閉じて、眠りについた…。

ストレッチャーに乗せられて、病室に運ばれていった哀はベッドに移されると…腕には点滴と口には酸素マスクが装着させられた…。

そして、哀の病室には…緊急事態を催す札が掛けられた…。

”面会謝絶”

…。
そんな事とは知らず…コナンはスヤスヤと、夢の中へ落ちて行った…。

次回ヒント

内緒

こんばんわww

今日は寒いですね (T|T) \ (^-^)
皆さんも、風邪ひかない様に
注意してくださいね (^-^)/

今日も、

眠い一日が終わりました

不本意ながら、居眠りをしてしまう始末…。
気をつけなきゃです。

今日は体力的にも精神的にも、

元気なのでo(^-^o

この回と、あと一話分投稿したいと
思います。

来週、少し時間が空くので…

来週までとっておこうと思いましたが…

夜中の0時に予約しておきます (^-^)/
起きてる方は、読んで見てください (^o^)/

それでは、また

0時にwwww

目を覚ましたコナンに坂井医師は額に手を当てて、容体を確認していた…。

「大丈夫だね…熱は下がってるよ…」

その言葉にコナンを含め…歩美、光彦、元太は安堵の表情を浮かべていた…。

学校へ行く為、支度をしていたコナンに坂井医師は話かけた…。

「コナン君…今日学校が終わったら、先に先生の所へ来てくれるかい？話があるから…」

「…うん、分かった…」

坂井医師の言葉に、不思議に思ったコナンだったけど…そう返事をすると、歩美達に連れられて…学校へ向かって行った…。

放課後の教室で…帰る支度をしていたコナンに近寄り、光彦は言った…。

「あの、コナン君…僕達、今日病院は遠慮しておきます…」

「何で??？」

「えっと、それは…ちょっと…小林先生に呼ばれてるの…」

「明日行くからって…灰原に伝えといてくれよ…」

「元太君!!！」

三人の言葉に不思議になるが…仕方なく一人で行く事にした…。

「ああ、なんか知らねーけど…分かったよ…」

「でも、病院までは付いてくから…」

「いいよ、小林先生んところに行かなきゃならねーんだろ?」

「ダメですよ…僕達には、コナン君を病院まで送り届けると言う、大事な任務があるんですから!!」

「小林先生ん所はその後でいいからよ…」

その行動に、より疑問が募るコナンだったが…そのまま、三人の言う通りに従う事にした…。

「じゃ、気をつけてください…」

「ああ、本当に行かねーのか?」

「明日行くから…」

「ふーん、じゃあ、ありがとな…」

そう言うとコナンは、いつも通りに哀の病室を訪れる為…階段を登り向かって行った。

病室の手前まで来たコナンは、今朝の坂井医師の言葉を思い出した…。

「あつ、そうだった…先に先生の所へ行くんだっけ…」

そう言って、戻ろうとした時…コナンの目を疑わせるような物が飛び込んで来た…。

「面会謝絶……?」

それを見た瞬間、コナンは慌てながら哀の病室の扉を勢いよく開けた…。

「灰原ああ!!!」

哀の病室に入ったコナンは目を疑った…。

そこには、機械音と共に、酸素マスクで口を覆われた哀が横たわっていた…。

「何で?どうして?」

その瞬間、コナンの脳裏に…朝の先生の言葉や…歩美達の不思議な行動が蘇って来る…。

「先生も…あいつらも…隠してたんだ…俺に…隠してたんだ…どうしてだよ…なんでだよ……」

哀の病室を訪れたコナンだったが、こんな哀の状態を目のあたりにして、教えてもらえなかった事に悔しさを募らせていた…。

そして、コナンは固く…固く…拳を握りしめ…その場に立ち尽くしていた…。

VoI・22

信じていたのに…隠されていたこと…

(後書き)

次回ヒント

どういうことだよ???

約束通り、0時です。

これから寝る人は、おやすみなさい (^ - ^) /

また明日の投稿をお楽しみにww

「灰原??」

そんな呼びかけに応えてくれない哀に…コナンは哀の手を取って、何度も声をかけた…。

「灰原、灰原、灰原……」

哀の身体を揺らし、早く目を覚まして欲しいと願うコナンは既に冷静さをなくしていた…。

「工藤君…??」

漸く目を覚ます灰原に、コナンは表情を固くしたまま、哀に問いかけた…。

「灰原!! どうした? 何があった…」

「聞いて…ないの?…発作が起きたのよ…昨日…貴方が帰った後…いよいよ…ヤバイわね、私……」

「発作??」

「もう、死ぬの…近いわね…私…このままじゃ…生きられないのよね……」

「灰原……」

いいながら、哀は涙が頬を伝った…。それを見たコナンはそのまま、哀の病室を飛び出した…。

「工藤君っっ!?!」

「わあっ、コナン君??」

丁度、哀の様子を見に来た看護婦さんと入れ違いになり、コナンの慌てた様子に驚き…看護婦さんも、慌てて哀の病室に入って行った…。

「哀ちゃん…大丈夫??」

「ええ…私、余計なこと言っただかしら??」

コナンの様子に不思議に思い、哀はポツリと漏らした…。

あんなに慌てたコナンを見た事がなかった哀は、コナンの様子が少し気がかりになっていた…。

「大丈夫よ、心配ないよ…」

看護婦さんにそう言われ、哀は少し微笑んだ…。

哀の病室を飛び出したコナンは、坂井医師を見つけると、勢いよく叫んでいた…。

「せんせい!!」

「コナン君!走っちゃダメだろ…」

そんな坂井医師の注意も聞こえないくらい哀の事を聞きたかったコナンは坂井医師のズボンを掴むと、叫ぶように聞いた…。

「先生!!灰原っなんで??なんで??面会謝絶ってどう言う事だよ

「先生！！なんでだよ！！教えてよ！！先生！！」

そう、叫ぶコナンに…先生はしゃがんでコナンの肩を掴むと、真剣な目をして聞いた。

「灰原さんの所に行ったのかい??」

「行ったよ…灰原…何であんな状態になってるんだよ！！昨日はあんなに元気だったのに！！教えてよ、先生！！」

「コナン君、どうして先に先生の所へ来てくれなかつたんだい？君がそうなると思っていたから、先に話そうとしていたんだよ…」

「そんなの、もうどうでもいいよ…聞かせてよ、灰原の事、聞かせてよっ！！」

哀の事で頭がいっぱいになっていたコナンに…坂井医師は言っただけで大丈夫かどうか、迷っていた…。

「実は、灰原さんはね…」

迷った拳句、いずれ言わなきゃいけないのだつたら、後にも先にも同じだと決心した坂井医師は、話す事にした…。

「実は、灰原さんね…病気の進行が少し早いんだ…このままだったら、早い段階で灰原さんの心臓は…」

言いかげながら、コナンの瞳を見つめる坂井医師は…コナンの瞳に溜まっている涙を見つめ、驚いた…。

「コナン君!？」

「もう、いいよ…灰原は死んじゃうんでしょ？僕より先に死んじゃうんでしょ？先生は助けられないんでしょ？だったら、もういいよ」

「!!」

「コナン君、落ち着きなさい!!」

涙目になって行くコナンの両手を掴む坂井医師は、コナンの顔をジツと見つめた…。

「結局、僕はあいつの事を助けられないじゃない!!何もできないじゃない!!僕は…あいつを…助けられないっ…」

そう言つて、コナンはだんだんと小さくなっていく声に嗚咽を漏らし…そのまま廊下に手を付き…悔しさを募らせていた…。

次回ヒント

逃げる

おはようございます。

今朝は早く目が覚めてしまい、この時間に投稿したいと思います。

コナンパニックです。

でも、それは哀ちゃんを思ってるからの行動になってるんですよ

www

この話に出て来るコナンは、子供っぽい、少し我儘なコナンになっています。

最後は、申し訳ないことになっていきますが、また次回の更新、楽しみにしててくださいね

凹んでしまったコナンの両手を掴む坂井医師は、コナンを立たせると…諭す様に問いかけた…。

「コナン君、灰原さんはね…小さいけど…小さいなりに、ちゃんと心臓を動かして生きてるよ…」

「……」

「灰原さんを救うんだろ？君が灰原さんを励まさないといけないんだろ？前、先生に言ったよね？そう、言ったよね？？」

コナンに向けて、必死にまくし立てながら言い聞かせようとする坂井医師に対して、コナンは自分の腕を掴んでる坂井医師の手を振り解こうと必死になってもがいていた…。

「離してよっつ先生、離してよっつ!!」

困った様な表情をしながら、コナンは坂井医師から離れるので必死になっていた…。

そんなコナンを坂井医師は抱き締めた…。

「離さない!!先生は絶対にコナン君を離したりしないよ!!だから、コナン君…お願いだから、諦めないでくれないか？まだ、望みは絶えてない…」

そんな坂井医師の言葉にも耳をくれず、コナンは力一杯坂井医師を押し退けた…。

「もう、いいよ…先生なんか、もう信用なんてしないよっ…！」

その弾みで坂井医師は、よろけ…コナンは涙目になりながら、坂井医師に背を向けると勢いよく走り出した…。

「コナン君…！」

コナンは坂井医師に追いかけられながらも、懸命に走り…自分の病室に逃げ込み、ベッドに潜り込んだ…。

コナンの後を追って来た坂井医師は、病室に戻ったのを見て安心する…。

坂井医師は、そつと息を吐くと…静かに病室に入り、ベッドの近くに置いてあった丸椅子に腰掛け、コナンが潜っている布団の上に手を置いて言った…。

「コナン君…先生に顔見せてくれないかな？」

「僕の事なんか、ほつといてよ…」

そう言うコナンに、坂井医師は話を始めた…。

「コナン君…隠していたわけじゃないんだ…言おうと思ったけど…君は昨日風邪をひいていただろ？だから、後々話すつもりだったんだよ…」

「もう、遅いよ…それに…あいつは…」

何かを言おうとして…口を閉じたコナンに、先生は優しく諭しはじめた…。

「コナン君…さつき、先生は灰原さんの病気…進行が早いって言ったけど…すぐについてわけじゃないんだよ…少しずつ、治療をしていけば、進行を遅らす事も出来るから…」

坂井医師のその言葉に、布団の中で目を見開くコナン…。

そんな、コナンの様子を知らず…坂井医師はそのまま話を続けた…。

「さつきは先生の言葉が足らず…誤解させちゃって、ごめんね…落ち着くまで、少し寝てなさい…先生、診察室にいるから、何かあったら来るんだよ…」

そう言い残すと、病室にコナンを一人にして…坂井医師は静かに出て行った…。

一人になったコナンは布団の中で悔しみを込めて…胸の内に秘めた想いと一緒に、涙を流していた…。

守ると決めた哀の命を守る事が出来ないかも知れないという事に…コナンは…諦めかけていた…。

次回ヒント

病気の事

こんばんわww

いつも、読んでいただき(^ - ^)

そして、お気に入りや感想頂いて

ありがとうございます。

凄く勇気づけられます(= 、 、 (人) 、 、 =)

いつも、感謝しています。

これからも、毎日の更新頑張っていきます。

よろしく願います。

では、また明日何時の投稿に

しようか、迷う所ですが…

更新まで、お待ちください(^ - ^)

「先生！！」

連絡をもらって駆けつけた小五郎と蘭は、坂井医師の姿を見つけると声をかけた…。

「今は落ち着いて、寝てると思いますので…心配はありませんが、精神的に傷付いているので…もう暫く、そっとしておいた方がいいでしょう…」

「そうですか、すみません…心配かけてしまって…」

そう言つて、頭を掻く小五郎に坂井医師は…申し訳なさそうに言葉を返した…。

「いえ、こちらこそ…言葉が足らず…コナン君を傷つけてしまい、すみません…」

「いいんすよ、あいつは…そんなタマじゃないですから…」

そう言つと、小五郎はズカズカとコナンの病室に向かった…。

残った蘭は、コナンの病状が気になり…坂井医師に問いかけた…。

「それと、先生…コナン君の病気の事なんですけど…」

「ええ、その事なんですけど…もう、多少なり身体の何処かに何か変化が現れてもおかしくない状況なんですけど…今の所何も問題はないんですよ…」

蘭にその事を聞かれ…坂井医師は、その事も…気がかりになっていた為、コナンの状態に…不思議に思っていた…。

「まあ、我々も…コナン君の身体には充分気を配っていますので…何か起こった時には、すぐ知らせますから…今の所は、安心していただく…」

「はい…分かりました」

蘭はそう説明した坂井医師に一礼をすると、コナンのいる病室に向かっていった…。

病室の扉を勢いよく開ける小五郎に、コナンは布団の中でそれを感じ取り、布団を強く握り締め…縮こまってしまった…。

「コナン！！起きろ…」

その言葉に返事をする事もなく…余計に布団を握る手に力が入る…。

それをみた小五郎は、無理やりにコナンの布団を剥がそうとする…。

「いいから、起きろっ…」

「取らないでよ…やめてよっ…！」

「やめてじゃねーんだよ…」

一生懸命に布団を握り締めるコナンの小さな反抗を、小五郎は負けずと布団を思い切り、引っ張りあげた…。

布団をとられたコナンはベッドに座り、小五郎から背中を向けた…。

そして、後からやって来た蘭は…コナンのその状況を心配していた

…。

「コナン君…」

蘭や小五郎に背を向けるコナンを心配し…蘭は声をかけたけど、返事をしてくれなかった…。

「こつちを向け…」

そんなコナンに一喝し、嫌がるコナンの肩を掴み…無理やりに身体を向かせる小五郎…。

「やだよ!…」

「いいから、向け!…」

コナンの顔を覗き込む2人は驚いた…。

コナンの瞳に、溢れそうなくらいの涙が溜まっていた事に目を見張った…。

「コナン…」

そうつぶやく小五郎から、コナンは顔を背けた…。

小さな身体で、精一杯哀を守ろうとしていた事は…一目瞭然だった…そんな想いを、広い心で受けとめていたコナンに…2人は言葉を失っていた…。

次回ヒント

付いていてやれ…

こんばんわwww

今日は仕事が早く終わりました(^ - ^)

この時間に投稿に来て、一安心です(^ - ^) /

少し、アンケートを

小説の、投稿時間がいつも気になるんですが…個人の状況にもよる
と思いますか…

何時くらいの投稿が理想的か、教えてもらえると、助かります。

重い沈黙のあと、コナンは静かに呟いた…。

「もう、いいんだ…僕はあいつを守る事出来なくなつたから…だから、いいんだ…」

その言葉に、小五郎は聞き返した…。

「何がいいんだよ？」

「僕はあいつを守れないんだ!!」

小五郎の問いに、コナンは叫ぶように答えた…。

「あいつ…昨日、発作を起こしたんだ…進行も早いつて…あいつは僕より先に死んじゃうんだ…僕だつて…あいつを守れないまま、死んでいくんだよ…」

「それがどうした？」

俯きながら…涙ながらに話すコナンに小五郎は厳しく問いかけた…そして、その声に驚いてコナンは顔をあげた…。

「まだ死ぬつて決まつてねーだろ!!お前が、諦めてどうするんだ!!決めたんじゃないのか!お前が、あの子を守るつててめーが自分で決めたんだろーが!!」

「でも、あいつはもう助からないんだ!!間に合わないんだよ!!」

コナンの肩を揺らしながら、小五郎は言葉を向けた…それに対して、コナンは大きな声で齒向かっていた…。

「それに！何であいつばかりなんだよ！！僕はまだ、何も無いのに…こんなに元気なのに…どうしてあいつばかり苦しまなきゃいけないんだよ！！」

「だったら、余計付いてやらなきゃいけねーだろ…分かってんのか、ためー！！今一番苦しい思いをしてんのは、おめーじゃねー…発作を起こしたあの子だろっつ！！…行ってやれ…待ってるぞ…きつと…守ってやるんだろ…最後まで…」

小五郎の言葉に涙をこぼしながら、俯くコナンは…日頃の哀の事を思い出しながら言った…。

「待ってないよ…僕の事なんて…だって、いつも僕が行くと不機嫌になるんだ…追い出される事だってあるし…だから…」

悲しそうに言うコナンを見ながら、小五郎はフツと笑いながら言った…。

「ばーか、照れ隠しに決まってるだろー？素直じゃねーからな…」

「そつよ、コナン君…行ってあげて…待ってるよ、きつと…」

小五郎とコナンのやり取りに、黙って見ていた蘭は…漸く口を挟む事が出来、コナンに哀の所へ会いに行くように勧めた…。

「でも…」

それでも渋っているコナンを見た小五郎は、コナンの両腕を持って立たせると…背中を押した…。

「いいから、行ってこい…」

「大丈夫よ……」

ほぼ強引に、2人に送り出されたコナン……。

ゆっくりとした足取りで哀の病室に向かうが、気が進まず……途中、小五郎や蘭の方を振り返っていた……。

そして、哀の病室の扉の前まで来ると……来た時にはあった”面会謝絶”の札が取り外されていた事に気が付いた……。

そんな違和感に、不思議になりながらも……コナンは哀のいる病室の扉を静かに開けた……。

次回ヒント

目眩

寒くなりましたので、皆さんも風邪には気を付けてくださいね (^

- ^) /

次回もお楽しみに (^ w w

P.S

一応、ストックがあるのでもう一話見たいと言う方は、お知らせください。

出来る限り、投稿致します。

「灰原……」

哀の病室に入ると、来た時にはあった張り詰めた緊迫した機械音もなくなり…哀の口を覆っていた酸素マスクもすっかり取れていた…。

それどころか、哀は起き上がって看護婦さんに点滴を外されている所だった…。

そんな状況に目を丸くし立ち竦んでいたコナンに哀は話しかけた。

「まったく…あんな風に出て行ったら、心配するじゃない…驚かさないでくれる？」

「……あっ、悪い……」

そう言う、コナンを見つめて…微笑む哀…。

そんな2人を見ながら、看護婦さんは処置を済まし…哀に声を掛けると、病室を出ていった…。

「じゃあ、哀ちゃん…何かあったら、ナースコール押してね…」

「ええ…」

看護師さんが出ていった後の病室で…コナンは哀に心配な目を送った…。

「大丈夫よ…さっきはごめんなさいね…私の勘違いよ…そんなにすぐには死なないらしいわ…」

「えっ？」

「さっきまで坂井先生がいたのよ…それで、説明してくれたわ…治療で病気の進行を遅らす事が出来るからって…」

そう話しながら、少し安心してる哀に…コナンもまた、安心していった…。

「あのさ、俺…」

「守ってくれるんでしょ？最後まで…付いててくれるわよね？」

言いかけたコナンの言葉を遮り、哀はコナンに問いかけた…。

「毎日の様に、しつこく見舞いに来てくれてるのは…そう言う事よね??？」

「灰原…」

「頼りにしてるわよ…江戸川君??？」

その言葉に、コナンは満面の笑みを浮かべ…言葉を返した…。

「ああ…でも、しつこくは余計だぞ…」

「あら？違ったかしら??？」

「お前なあ…」

さっきまで悩んでいたコナンの心を解き放ったのは、紛れもない…哀の笑顔だった…。

そんな哀の笑顔を見たこの時ばかりは、これ以上はない…安心感がコナンの中に芽生えた。

二人は暫く、微笑みながら見つめていた…。

哀の病室の帰り…コナンは早く小五郎達に知らせようと…病室まで走っていた…。

コナンの事が心配で、コナンの病室の前で帰りを待っていた蘭の姿を見つけると、走りながら呼んだ…。

「蘭ねーちゃんー!!」

「コナン君…」

その声に振り向くと、コナンの方へ急いでかけ出した…。

蘭の方へ走っていたコナンだったけど…急に目の前がぼやけて立ち止まる…。

「あれ？」

壁に手を置いて自分の身体を支えるコナンに、蘭は慌てて駆け寄った…。

「コナン君?どうしたの??」

「なんか、目眩が…」

そう言った瞬間、コナンはよろめき、蘭の身体に支えられて…倒れこんでしまった…。

「コナン君?コナン君ー!!」

意識を失ったコナンは、そのまま深く眠りにつき…蘭の呼びかけに

も応じる事はなかった…。

次回ヒント

先生の話

次回も楽しみにしててくださいね

いつも、読んでくださり

ありがとうございます(^・^)(

“…くん…どうくん…くどう…くどうくん…!”

誰かに呼ばれた声で目を覚ましたコナン…。

「灰原っっ…」

それが、哀の声だと錯覚し…ハッとして目を開けた…。

「コナン…」

「おじさん…あっ、ごめん…僕さっき目眩がして…」

目の前に居るのが、小五郎だと分かると…起き上がるつと、ゆっく
り身体を起こすのを試みた。

「いいから、寝てろ…先生から話があるそうだ…少し、話せるか？
」

「えっ？いいよ、後で…さっき先生にひどい事言っちゃったから
さ…」

そんな事を言うコナンの頭を叩きながら言った…。

「大丈夫だ…先生はんな事、気にしちゃいねーよ…大事な話なん
だ…聞けるか？」

「まさか、灰原っ…??？」

大事な話と言われ、勢いよくベッドから起きあがるコナンに…小五
郎は再びベッドに寝かした…。

「あの子の事は大丈夫だ…今は落ち着いてる…先生呼んでくるからな…大人しく寝てるよ…」

「えっ？うん…」

そう言つて、コナンを一人残して小五郎は病室を出ていった…。

「お父さん…」

「蘭…落ち着いたか…？」

病室の外で、泣きながら待っていた蘭を心配しながら、声を返した…。

「あいつも覚悟してる…お前だって、分かつてるだろ…？」

「うん…でも、私…」

小五郎の言い聞かせにも、ぐずる蘭に小五郎は厳しい目で言った…。

「蘭…いいか？コナンの目の前で泣くんじゃねーぞ…泣いたら、俺は許さねーからな…」

「お父さん…うん…」

蘭の返事に安心すると…小五郎は蘭を連れて坂井医師を呼びに行つた…。

「目、覚めたかな？コナン君…」

「先生…」

さっきの騒動が気掛かりになっていたコナンは、坂井医師から目線を反らした…。

「コナン君…：そろそろ、学校は終わりにしないかい？」

「えっ、何で??」

「さっき…倒れただろ？そろそろ安静にしてくれないと…今度はコナン君の身体が心配になって来るからね…」

そう話す坂井医師にコナンは平気な顔をして言葉を返した…。

「大丈夫だよ…さっきは目眩がただけだから…」

「その目眩が…病気の進行だって身体が訴えてるんだよ…：だから、もう学校はお終い…後は、病院で…」

「やだね…やだね！そんなの…学校で倒れたわけじゃないのに…まだ、何も起きてないのにさ！！学校には行くから！！お終いなんてやだからね！！」

コナンは勢い良く起きあがると…坂井医師に向かって叫んでいた…。

坂井医師の説得も虚しく…コナンは頑なに、学校に行き続ける事を断言した…。

「コナン君…」

坂井医師に瞳を揺らし見つめていたコナンは、静かに俯くと…話始めた…。

「先生…行かせてよ…：ギリギリまで、行かせてよ…先生…：分かるでしょ？死んじゃったら、僕は学校に行く事出来ないんだよ…：」

行きたいんだ…学校に…もう少しだけ、僕の我儘に付き合っ
てよ…先生……」

「コナン君…このまま学校行ったら、倒れるかもしれないよ…
…」

坂井医師の問いに、コナンは俯いたまま言った…。

「大丈夫……」

そして、坂井医師の顔を見上げると満面の笑みで答えた…。

「僕には、あいつらがいるからさ……」

そんなコナンに驚き、微笑む坂井医師はゆっくりしゃがむと…コナ
ンの頭を撫でた…。

「コナン君…これからが、本当に辛くなって行くんだよ…覚悟しな
きゃいけないんだよ…」

「うん、大丈夫だよ…僕は最初から覚悟してるから…」

その言葉に、坂井医師の瞳から涙がこぼれ落ちた…。

コナンの周りのとりまく存在が、コナン自身を強くすると…そんな
思いを胸の内で、ひしひしと感じていた…。

Vol. 28

大事な話 (後書き)

次回ヒント

コナンの行動

また、夜にきまーす。

読みながら、待っててくださいね (^ - ^)

次の日の夕方…様子を見るため、念の為一日だけ学校を休んだコナンを心配して…歩美、元太、光彦がお見舞いに来ていた…。

コナンの背中をさする坂井医師の後ろから、心配そうな面持ちでコナンを見ていた…。

病気の進行が見られたコナンの身体は、少しづつ体力が失われていた…。

酸素マスクを装着し、ベッドのシーツを握りしめているコナンは坂井医師に背中を摩られながら…ゆっくりと呼吸をしていた…。

「終わったよ、コナン君…大丈夫かい？」

「うん、ありがとう…」

そう言うコナンの頭を撫でながら、微笑む坂井医師は歩美達に少し微笑むと、”よろしく”と言って病室を出て行った…。

「コナン君…大丈夫？」

「平気だよ…灰原の所に行くんだろ？」

「あっ、はい…」

そう返事するのを見たコナンは、酸素マスクを外して起き上がった…そして、着替えを取ると…そのままパジャマを脱ぎ出した…。

「やだあ、コナン君…」

いつも看護婦さんの前で普通に脱ぐ癖がついていて…つい、歩美の前でも脱いでしまったコナン…。

「ちよ、ちよっと、コナン君…」

「あつ、悪い…」

歩美が恥ずかしそうに背を向けたのを見て、元太と光彦はコナンを叱った…。

「気をつけるよ、コナン!…」

「女の子の前で脱ぐなんて、デリカシーの無さにも程があります…」

「つい、いつもの癖で…」

そう言って笑うコナンを元太と光彦は呆れていた…。

「じゃ、行くうぜ…」

「はい…行きましょ…」

声を揃えて哀の病室に向かいながら、コナンの身体を心配する歩美達の視線をコナンは気づかないフリをしていた…。

「よっ!…」

コナンは元気良く哀の病室の扉を開けた…。

「何か、用??」

丁度哀は寝ていたらしく…コナンに起こされた事で不機嫌なまま迎えた…。

そんな哀に、コナン達はギョツとした…。

「灰原…いいから、起きろよ…」

「ちよっと…手荒なマネしないでくれる？」

コナンが哀の手を引っ張って、起こした事で…哀は更に不機嫌になっ
つていった…。

そんな哀を見て、コナンは少し安心していた…。

この間までは、自分の命を完璧に諦めて…泣いていた哀に…。

発作を起こし…涙を流していた哀に…。

今、コナン自信…哀に対して何が出来たのかを不機嫌な哀を目の前
にして考えていた…。

次回ヒント

探偵団の力

お待たせしました

この小説を楽しみにしていただいている方がいて、すごく嬉しいです。

コメント返しに

少し時間がかかりますが、

待っていてもらえると助かります。

次回もまた、よろしく

お願いします。

それから…数日の間…コナンにも哀にも、それほど心配する程の事は起きず…暫くは…平和な日々を送っていた…。

コナンが学校に行く時…必ず坂井医師の手によって、コナンの背中を摩るのを日課としていた…。

そして、この日もいつも通りに坂井医師がコナンの背中を摩っていた…。

「先生……?」

この日は、いつもより長く背中を摩る坂井医師に、不思議になって声をかけるコナン…。

「先生、もういいよ…」

「もう少しだけ…」

「大丈夫だよ…先生…」

そっぴいなから、立ち上がるコナンを心配になりながら尋ねる坂井医師…。

「本当に大丈夫かい?」

「平気だよ…じゃあ、行ってきます。」

「ああ、行ってらっしゃい」

少し心配になる坂井医師だったが…歩美達に合流して挨拶するコナンを見ると…少しばかり、安心していた…。

四人で元気良く歩いていると、病院の外で待っていた蘭に気付き…歩美が叫ぶ…。

「蘭おねーさんー!!」

「皆、おはよう…コナン君も、おはよう…」

そう言っつて、微笑みをくれる蘭の顔を見ながら、コナンも笑顔を返し、返事をした…。

「おはよう、蘭ねーちゃん!!」

そして、蘭の手を握ると…学校までの距離をゆっくりと歩いて行っ…た…。

「じゃあ、コナン君…気を付けて行って来るのよ…」

「うん、分かった…じゃあね!!」

小学校まで送り届けた蘭は、コナンが校舎の中に入って行くのを確認すると…蘭も高校へ向かった…。

そして、3時間目の授業を迎えた頃…コナンは突然の目眩に襲われて、そのまま机に顔をうずめた…。

”ガシャーン…”

その時に落ちた筆箱の音に驚いて、担任の小林先生がコナンの席に

近寄る…。

「コナン君…どうしたの??」

その声に薄っすら目を開けるコナンは、声を絞り出しながら小林先生に委ねた…。

「小林先生…坂井先生…を、呼んでくれる…??」

小さく呼吸をしながら、コナンはゆっくりと言葉を発した…。

「大丈夫?コナン君、待てる?」

「うん…」

「分かった…すぐ呼んで来るからね、待ってるのよ…」

そう言っつて、急いで教室を出た小林先生は坂井医師に連絡を試みよう…職員室に駆け込んで受話器を取った…。

「…分かりました…すぐに向かいます…我々が到着するまでの間…コナン君の背中を摩ってあげて頂けますか??」

「あつ、はい分かりました…」

小林先生はそれだけ聞くと、急いで教室へ戻って行った…。

教室へ戻った小林先生の目に飛び込んできた光景は、今までコナンを見守ってきた証と言えるそのものを映し出していた…。

「コナン君、大丈夫ですか？」

「歩美の手を握って…」

歩美、光彦、元太達を筆頭に…次々とコナンの周りに集まって、手助けをしていた生徒達…。

コナンの背中を摩る元太、賢明に励ます光彦やクラスの皆…そして、歩美はコナンの手をしっかりと握っていた…。

コナンも小さく呼吸をしながら、硬く目を瞑り…歩美の手をしっかりと握り返していた…。

そんな光景を小林先生は、目を潤ませながら…生徒達の優しさに、ただじっと見つめていた…。

次回ヒント

分かってた

おはようございます。

皆さんが起きる頃には新着に
なっていると思います。

今日お休みの方は

ゆっくりお過ごしください。

今日のコナンは後編ですね (^ - ^)

私も楽しみにしています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4767z/>

小さな運命共同体

2012年1月14日03時46分発行